

あを 7

2019





老人のピカソを語る達磨かな
小さな木菟掌にピカソ莞爾たり
炎天の鐵路燃え立つスーチン晝
土用浪富士そこにある北齊圖
ゴッホむかふ向きに行く冬木の瘤
ゴッホ画架負ひ犬ふぐりの道来る
鳥の巢か宿木か見ゆゴッホの墓
晩鐘やゴッホ筆おく犬ふぐり

あそ

八 月



須賀忠男

峰
櫻

東京

佐藤 喜孝

木の影の墜ちる去年の落葉谷
尋ねたくおもふひともと峰櫻
遅櫻暮坂峠六合村に
おそ春の足湯の指の短けれ
もつれあふ足湯の指と春日ざし
足湯にて次のうぐひす待ってゐる
橡若葉湯氣もゆたかに饅頭屋



東京

篠田 純子

祭

令和初神輿歌舞伎座前に揉みにけり
神輿見下ろしたと家壊さるる佃島
神田祭きつねの面の若い衆
電気ブランあふり三社祭さんじゃの神輿追ふ
バッテリーセンターの快音神輿過ぐ

石川

定梶じよう

春月

マッチ箱のこれは茄子の種のはず
定期バス大きに遅延うらけし
読みかけの聖書と猫と春炬燵
桜しべ降るダックスフントつまづくな
地震の予感春月涸井戸へ及び

東京

須賀 敏子

夏めく日

子規庵の畳に正座夏めく日
夏場所や一喜一憂ほくと北勝富士
三富さんとめの小径金蘭咲きにけり
西の窓定家葛の花いとど
母の日やまだ頑張れと山のシャツ

東京

田中 藤穂

二階バス

二階バス新樹に触るるばかりなり
帰り道海に大きな虹が立つ
鎌倉の古刹荒れたり沙羅の花
たどりゐる父の家系図藤の花
時を経て濃くなる昔木下闇



三重 長崎 桂子

黄水仙

黄水仙 去年より早く顔見せる
十六個顔を覗かせた黄水仙
膝入れて居眠りおそふ春炬燵
四月尽庭園灯も消えにけり
葉桜や空気味ひ歩の緩む

東京 森 なほ子

若葉影

緑濃き窓の中にも大相撲
四阿に街の音聞く薄暑かな
山椿地に蒸れてゐる日の盛り
イヤホンの視線泳がす街わかば
黒塗りの御用車滑る若葉影

東京 赤座 典子

枇杷

「令和」への大型連休庭若葉
カステラのざらめを刮ぐ立夏かな
新幹線の運転手が夢子供の日
鉄線花江戸紫を極めたる
種種種それでも枇杷は黄金色

埼玉 秋川 泉

令和元年

春の野に地下足袋で出るめでたき日
雨ふくむ若葉匂ひて改元す
三編の鬘光る春の馬
そら豆がごちそうになる茶飲会
フルートが大瑠璃ききて下山する



埼玉

大日向幸江

筍

筍の疲れを知らぬ青天井
万緑や銅叩かれしなやかに
旧道の途切れる辺り滴りぬ
五月晴飛行機雲の白い道
入梅や雨天兼用傘を買ふ

東京

七郎衛門吉保

十連休

「象徴」は甘味苦味の露の味噌
みどりの日ズームレンズで見る昭和
ハンドルは護憲へ憲法記念の日
変化球で令和迎へし清和かな
温泉の町や食事難民十連休

佐藤 恭子

雑詠

さるすべりの花をいただき垣はなやか
川音に暑さしのげる哲学堂
憲法九条水盃といふお酒
岩波の高く高くと蜻蛉魚
掌におかめどんぐり温めし



老櫻けむりのやうな幹で立つ

佐藤喜孝

春闘の闘を忘れて平成尽

七郎衛門吉保

花筏一直線に鳥よぎる

篠田純子

けつまづきさうな浮雲うらけし

定梶じょう

目借時カタコトカタとファックス機

須賀敏子

春の河原五平餅売しづかなり

田中藤穂



蚕豆のはしりの食卓祖父母思ふ

長崎桂子

翳り来て寂しくなりぬ春の土手

森なほ子

映画見て余韻のベンチうらけし

赤座典子

蘂のその幹にあるあたたかさ

秋川 泉

だらだらと吹く春風や寺詣

大日向幸江

朧の露に濡れてるぬないよな

佐藤恭子



拭きこみし漆のうへに牡丹雪

佐藤 喜孝

私は趣味として、写真作品づくりに励んだ時期がある。その出来の良し悪しは、シャッターチャンスと、プリント画像のトリミングに左右される。この句は正しくその一枚に見える。漆黒の磨き板、数秒で溶けてしまう牡丹雪。この数秒のシャッターチャンスを捉え、黒と白の対比をズームアップした画像に。岡本太郎風に云うと「俳句は写真だ!」と気が付いたような気がする。(吉保)

春障子四角に開ける猫の道

大日向幸江

昔のことですが、我が家の猫用にも、ベニヤ板のくぐり戸がありました。幸江さんの猫も障子の一角を、ひらひらと通り抜けているのでしょうか。同じように、自分専用の通り道として当たり前のような顔をして。(典子)

沿ふ川を半襟にして花の帯

七郎衛門吉保

去年の『あを』を飾って戴いた吉保さんの作品を思ひ出した。和服のことは皆目分らないが、川沿ひの桜並木を華やかな和服に見立てたユニークな表現。川を半襟に譬へ一段とおもしろみが増

した。得意分野を見事に生かされてゐる。(喜孝)

魚の影春の日ざしの柳瀬川

篠田 純子

四月に催したお花見吟行会場に、沿って流れる柳瀬川。吟行世話人への挨拶句として作句されたのではと思う。「挨拶句の本命は即興、その時の気合いと生々しさ」と兜太は記しているが、そのとおりに作句できる作者が羨ましい。同じ景を「花冷えや川遊びの子なく」で下五に行き詰まり、この句の上五を勝手に拝借(盗作?転作?類似?)し、一句としたのが気になっている。(吉保)

廃村に残れる一寺磴遅日

定梶じょう

都会の住民にとつての廃村は、テレビ・新聞などから得る、間接的な知識とか反応になる。作者は身近に廃村を感じる地域に在るのであろう。廃村後の寺の本堂や鳥居など木の構造物は、朽ちが進みその姿を変えてゆく。他方で磴、即ち石の構造物は廃村になろうとも、朽ちることなく変わることなく、そこに在る。直接的に対象物と接する、作者の感性が読み取れる一句では。(吉保)

何だかな何もない日の春炬燵

須賀 敏子

山行をはじめ、色々と驚異的にこなしていらっしゃる敏子さん。そのいつも忙しい敏子さんにぽつかりと何もない日が。「何だかな」という感想がよく分かります。でもその一日も、次の予定をあ

れこれと考え、楽しく過ごされたことでしょう。(典子)

雨戸繰る今朝ほころびし花杏

田中 藤穂

以前句会で伺った藤穂さんのお宅は、庭に面して今時貴重な縁側がありました。一日の始まり雨戸をあけると、年数を経た様々な木々の変化がすぐわかります。その朝は杏の薄紅色のまるい花びらが、開き始めていました。次の朝にはまた新しい発見が！なんと豊かな一日の始まりでしょう！

(典子)

吊し雛人の動きと平行に

長崎 桂子

越後湯沢駅コンコースの突き当りに、人の目を引く大きな吊るし雛が飾られている。地域的に近い山形県酒田市が産地の、傘福という形の吊るし雛のようだ。直径二メートル近くの開いた傘の下に、縮緬で作られた人形を括り付けた、三メートル程の紐が何十本と下がっている。電動でゆつくりと傘が回転し、吊るし雛の裾をひるげる。見る人もこれに添ってゆつくりと動いている。(吉保)

角砂糖 紅茶に沈め春浅し

森 なほ子

この句の「角砂糖」は、真つ白なキューブではなく、薄茶の混じった少しでこぼこな角砂糖ではないかと、勝手に想像しました。掻きまわさないままの、沈んだ角砂糖が自然に溶けて、少しずつ

紅茶が甘くなっていくのを楽しんでいる。春浅しという季語にぴったりの、豊かなひと時ですね。

(典子)

春の雨をはらはぬうちの薄日差

赤座 典子

春の雨の上がりぎはをこのやうに柔らかくキラキラと表現された。中七の旧かなづかひの働きが一段と見事。「うちの」の「の」も良い働きをしてゐる。水茎の跡も麗しく短冊にしたため眺めてみたい俳句である。(喜孝)

日脚伸ぶ各駅停車のひとり旅

秋川 泉

愛用本に「日脚伸ぶ」は二十九句掲載されている。これから何かが始まったり、何かを始めよう風の句が多い。その何かに一人旅を選択したのだろう。一人旅に各駅停車は外せないシチュエーション。同じく各駅停車に青春切符は外せない。いつも元気でエネルギー、そしてカラオケでは「電線音頭」で楽しませてくれるような作者には、今でも青春切符に違和感がない。(吉保)

俳句の尾緒

定梶じょう

『田の雁や』

ある自動車ディーラーの営業マンから聞いた話です。軽自動車の利用者は圧倒的に女性が多いわけですが、壮年期の男性にも購入者が広がったのは21世紀に入ってからなんだそうです。

私の知識では、力がない、だからスピードが出ない、どうかするとエンジンが上がる、等々、いい印象がなかったのですが、性能が普通車と変わらぬこと近年、瞠目にあたいます、と言います。

田の雁や里の人数はけふもへる 一茶

がとり上げてあり、俳句総合誌の記事を私が写したものの。評者の名は記してありませんが「過疎は一茶の時代、すでに押し寄せてきていた」とあります。

評者は若い方なんでしょうか、信州がそんな昔から出稼ぎの地であることを知らない。「人がへる」即ち「過疎」、としか想いつかない。前述の、車種の象徴性の喪失は歴史知識の不足とは言わないかもしれませんが、過疎と出稼ぎを区別し得ないのは知識の不足だと思う。

もつとも、知らなくとも現代、俳句を作ることはできるわけで、それで宜しいとするのが総合誌の認識なんでしょうし、もしかしたら編集者自身、里の人数が減るのは過疎の所為である、と思っている可能性があります。

過疎地に住まってこれは少し異常だと認識するようになったのは、「限界集落」なる社会学の用語が使われ出した頃でしたらうか。旧村の、小学四校、

私ごとになります、今度普通車から軽自動車に替えて一カ月経ちます。なる程、加速の宜しさは驚くほどで、うっかりしているとすぐ時速100を越えてしまう。危ういかな、です。昔むかしは、40を越えるのに少々時間がかかりましたし、60を越えること下り坂以外は至難。それが男性（しかも先述の通り、青壮年期の方々なんだそうです）の利用者が増えていると言う。これは以前のように、この年代なら此の車種あの車両、という意識が青年達になくなっているのではなからうか、ということらしい。あるいは自家用の車種を時代年代の象徴としなくなっているのでは、ということらしい。そしてこのことは、詩歌の評言にも表れてきていると思うのは、あながち付会ではない、と見ているのです。

新しい車両に交換するに当たり、ダッシュボードやトランクを整理したのですが、いろいろメモ帳のたぐいが出てきました。何ともしばらなことです、その中に

中学一校が次々と廃校。やがて私たちの住まった「つるぎ剣地村」は「ふげし鳳至郡門前町字剣地」になり今は「輪島市門前町剣地」に。

「過疎地」、「限界集落」はいずれも俳句の素材になり難いことばですが、「過疎」二文字のことばは一時ひっきりなしに句に用いられることはありました。そのうち倦きられてしまつて今はその言葉、口の端にかけられることさえなくなつてしまった。哀れなものです。

同じメモ帳に

永六輔著『商人』あきんど

毎月 二十一日、京は東寺の弘法市で。

買うておくれやす！

おたのもうします・・・

あては養子だつせエ！

も筆写してあります。永六輔のセンスと関西人の川

柳的機知。

戦前。すなわち新かな以前の川柳はあらゆる面で俳句と遜色がなかった。現代の川柳は少しでも文語臭があること不可としますが、本来いい川柳に文語も口語もない筈なんですけど、まアむかしから口語句が多いこと確か。

良妻で賢女で女史で家にぬず

川上三太郎

招き猫静かな恪気聞いている

篠村 力好

考えてほしいと女 年が上

加賀 破竹

あの人と出たら帰って来ますまい

食満けま 南北

悪友に眼鏡をかけた妻があり

上田 芝有

第一人者の三太郎は東京人ですけど、平均したらやっぱり関西人の方がいい句を作っている。ユーモアのセンスにはその土地の反映があるのでしよう。

一方俳句は、甲乙に地域差のないことを喜ぶ傾きがありますし逆に、地域差は大いにあり得る、とす

る人も少なくない。そして地域差は実は個人差に発していて個人差（個性といってもいいのですが）は奨励誘掖の宜しきを得るか否かにあるのではないか。言いかえれば、投句者と選句者、複数の人間で作り上げてゆくのが俳句、というものだ、と。連歌連句の歴史を、やっぱり現代俳句はしよっているのです。



佐藤喜孝



須賀 敏子

駅近しクレーンと競ふ大夏木

短夜や静かに雨の降り続く

短き夜思ひは尽きぬ平成に

◎街の開発で駅の近辺が騒がしい。高階のビル建設のためのクレーンが夏空に伸びてゐる。負けずに高さを競ふやうに大木が茂ってゐる。開発のために伐採されぬことを願ふ。下五の「夏大木」がどこか不自然な感じ。「競ふ」とあるので「大」を取り夏の木をもう少しはつきり見せてもよい。例へば「夏櫓」とか。

◎いま、台風六号の余波で雨が急に降ってきた。慌ててあちこちの窓を閉

めてまはった。掲句の雨はこのやうのゲリラ豪雨とは違ふ。雨もその気で見ると風情がある。雨宿りなどもよい。

美しくなる春雨に会ふたびに 和田華凜 ホトトギス

掲句、取り立てて事が起きてゐない。字句通り「静かに雨は降り続く」である。滋味ある一句。

◎前句に続いて短夜の一句。ブラウン管のなかで平成の字を掲げてゐたのが昨日のやうだが、指を折つてみれば三十年前のこと。「思ひは尽きぬ」である。季語は前句と同じく「短夜や」がよい。「降る雪や明治は遠くなりけり」ではないが、回想に切字の「や」は似合ふ。遠慮無く使つてみたい。

森なほ子

民家園に時止まりゐて夏の雲

梅雨晴間鍛冶場に汗を惜しみなく

涼しさや木・紙・藁の家に入り

◎川崎の民家園に遊んだ時のことが甦った。敷居を跨ぎ薄暗い三和土に立つと異空間。まさに「時止まりゐて」である。目が慣れるまで少々時間がかかる。外との明るさの違いがはなはだしい。雲も湧いてゐる明と暗。静と動。

◎この句、前句と同じ場所の作品として読ませてもらふ。鍛冶場には鍛冶屋さんはゐない。汗は来場者の汗。鍛冶場で覚えたこの汗を、往時の鍛冶屋さんの汗に比す。「惜しみなく」にその汗をこのやうに思ひ、愉しまれてゐる作者。面白い作りの俳句。

◎徒然草の「家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなるところにも住まる」に適った造りの家屋に足を踏み入れた所。エアコンの涼しさとは比べやうもない。あらためて在来工法の建築の佳さを知ったが、むかしに戻るわけには行かぬ事情もある。一寸私の呟き、読まなくともよい。「に入り」はなくとも済む。「涼しさや木紙藁に土の家」。土も大切な建築素材だが涼味に欠けるか、土を竹にしようか。となほ子さんの句で遊ばせて貰った。中黒はない方が涼しい。

赤座典子

六月や 頗る 閑散 温泉街

車麩の「おばあちゃん煮」と冷し酒

でで虫や山間に消ゆテールライト

◎「頗る閑散」で何度か訪れたことのある温泉地のやうだ。温泉地の閑散としてゐるのは訪れたものの心も萎えるもの。作者は「六月や」で閑散の因をご存知らしい。二八と云ふ言葉もあるがこの温泉地は六月が鬼門のやうだ。ある人が句中にもがないと上手く句が収まらない、と云つてゐた。たしかにこの句には中心になるものが見当たらない。伝達力が弱いのはそのためかも知れぬ。

◎「おばあちゃん煮」はその土地の郷土料理か？お店自慢の料理か？伝達力といふことでは前句に似て弱い。名詞のみの句は読み手も事前に分かつてゐる事柄であれば成り立つ。さうでない時は、形容する言葉が必要なのであらう。しかし読後、ご無沙汰してゐる車麩を食べたくなった。

◎でで虫の登場振りがユニークで面白い。車のテールライトや列車の尾灯を見送るのはドラマである。この国句にはさういふ雰囲気は希薄。人は登場してこない。でで虫が主役である。ただリズムにもう少し拘つて欲しい。整えすぎるのもよくない

が「山間にテールランプがかたつむり」「山間に尾灯の消えてかたつむり」テールライトよりテールランプの方がすこし明かりが弱く感じるのだが個人の好みかも知れぬ。

大日向幸江

夏帽子拾はれてよりのお付合ひ

丹沢の水の産湯や夏来る

踊り子の歩きし浜や黒南風の

◎帽子はよく風に飛ばされる。飛ばされた帽子を見てゐるとそのスピードに驚く。運よく何かに引つかかりでもして手元に戻ることがある。私の帽子もいくつか街の藻屑となった。幸枝さんの帽子は良い人に拾われたやう。帽子が縁でお付き合ひ。「お付き合ひ」は若い人には使ひにくい上品な言葉。

◎神田の水で産湯を使ひとは江戸っ子の自慢の決めセリフ。掲句も江戸っ子の決めセリフに負けず小気味良い。産湯をいま使はれてゐるのか、さうではないのか判然としないが、それより氣つ風によさに気分爽快になった。

◎踊り子の歩きに目を留めたところが面白い。あとは表現の整理。幸枝さんがよく用いる句末のの。不安定でこの句には不向き。回想に仕立てるのはやめ、季重なりに注意して推敲してみてください。面白い句になると思ひます。

秋川 泉

夜の更けて定家葛のにほふ道
注連縄に浜風強し海開き
枇杷の実の降る朝鴉かまびすし

◎夜はことに嗅覚が敏感になるらしい。金木犀と夜の組合はせはしばしば目にする。泉さんも極上の時を過ごされた。又同じやうな場に行き合ったらこれを越える句を作られることもふ。

咲き増ゆる定家葛の香が闇に 田中 藤穂
西窓の定家葛の芳しく 須賀 敏子

◎岩礁に注連縄が張られてゐる景が浮かんだ。「浜風強し」が辺りの引き締まった様子を伝へる。

ちかごろ堀内一郎さんの蔵書の山本健吉編「季寄せ」を毎日繙く。知らない季語があるかと思ふと、「海開き」はない。海水浴場始めますよと云ふことは最近の事象ではないのだが。「海の家」はあるが、焼きそばなどを売ってゐはゐない。「山荘」と同じく避暑のための家である。

脇道に逸れた。掲句、一寸気がかりなのは、「浜」と「海」が一句に収まってゐること。何回か読み、気にしないことにした。力のある佳句。

◎枇杷の実が降るやうに落ちてくる。「降る」で豊穡さがうかがへる。その朝の鴉のかまびすしいこと。きつとほかの鳥も翔けつけてくることだらう。「かまびすし」で鴉と作者の関わり方が分かる。俳句はどこか宗教、宗教とまで行かなくともそんな側面もある。嘘でも鴉の側に立って読むのも一興。「かまびすし」さが少しは和らぐかも。

長崎 桂子

六月や町は挙って斎王まつり
梅雨に入る隅隅までを湿度計
晃晃と六月の望や安けく

◎「斎王まつり」は、三重県明石町で六月の第一週末の二日間に行はれる、と知る。賑やかで華麗なまつりのやうだ。これだけ期日もはつきりしてゐるのに歳時記には見当たらない。そこで桂子さんは「六月や」と置いたのだらう。桂子さんの昂ぶるやうが伝はってくる。

◎句意をくみ取るのにぐるぐる同じ所を回ってしまった。作者と読み手のささいなずれなのだとおもふ。わたしの行き止まったのは「隅隅までを」の「を」で躓いてしまった。

◎調子を整へて「晃晃と六月の望安らけく」としてみた。

七郎衛門吉保

梅 雨 寒 や 齡 と 刃 暴 走 す
世 事 多 難 ど ん よ り に 染 む 梅 雨 曇
ど ん よ り の 梅 雨 空 席 捲 群 れ 烏

◎先月の「俳句の尾鰭」で定梶じょうさんが川柳に触れられてゐた。掲句も俳句目線で読むと難解だが、川柳目線で読むと作者の云いたいことが見えてくる。ニュースでよく見聞きする高齢者の運転事故。刃物・ピストル・ガソリンと手当たり次第

に凶器と化す。それを齡の暴走、刃の暴走といったのだらう。社会の歪みと片付けるにしているなんとも悲惨。人生終はらんとする時の人身事故。被害者の無念、加害者の無念、「梅雨寒や」である。句は少しわかり易く「梅雨寒や高齢者運転暴走す」。いや生すぎる。「暴走す」は句の後ろに仕舞ひたい。

◎世事多難・梅雨曇・梅雨空・群れ鴉・どんより。同じ色彩の語彙で句が沈みすぎてしまった。

「烏」といふ漢字。烏から眼を取つてある。全身黒いので烏の眼が何処にあるか分からないのでこんな字になったと聞いたことがある。烏の漢字の故事にまなぶ所が句作りにもあるやうだ。

篠田純子

電 気 ブ ラ ン の グ ラ ス の カ ー ヴ 夏 は 来 ん
武 家 町 の ク ラ ン ク の 道 青 時 雨
に や に や と 夏 の ア ル パ カ 反 芻 す

◎カタカナが一句に三つも入れてある。意図的なのであらう。

下町をこよなく愛しゐる純子さんが神谷バーのカウンターで名物の電気ブランを愉しんでゐる。指でもてあそぶグラス、そのグラスのカーブに注意が行った。三つのカタカナ語で爽やかに夏を迎へた心もちを表現してゐる。カーブをカーヴといふところにもこの句への一塩の計らいを知る。

純子さんたちと吟行で神谷バーに寄ったことがあった。もう八年も経ってしまつた。「はしり梅雨浅草」の一の一 喜孝」

◎城下町は城を守るための工夫がされてゐる。その一つに敵の進入を遅らせ、まどはすために道路にも工夫がされてゐる。食い違ひ一丁字路、中でも鍵の手が知られてゐる。いまはクランクといった方が通じるのだらうか。しつとりとした青梅雨の城下町、鍵の手といふと句にカビが生えたと危惧されてのクランクか。

徹とクランクで思ひ出した。エンストした車から降りてきた運転手が自動車の鼻先に棒を突っ込んでエンジン復活させてゐた。あの鉄の棒も確か折れ曲がつてゐた。◎アルパカで三句ともカタカナ語のお世話になった。反芻してゐるアルパカの顔を正面から見たら拍手んにやにやは言い得て妙。夏はここではどのやうな働きをしてゐるのだらうか。有季への計らいだけのやうに読める。のは残念。

定樞じょう

店先や梅雨入のむかし赤電話

朝焼の沖より喇叭聞こえさう

時計塔針の懈怠へ梅雨朝日

◎町から商店が消えてゆく。家の筋交いに食料品店があつた。夫は韓国人だといふううはさ。その店先に台の上に乗った公衆電話があつた。たしか青でなく赤だつたとおもふ。妻に先立たれた「若葉屋」は数年後にアパートになり店主は見かけなくなった。何所にでもある嘶である。といふやうなことをじょうさんも回想されてゐるのだらうか。梅雨といふ季節の折り目にちよこつと「むかし」が顔を出す。

◎壮大な景を前にして音楽が聞こえてくる。じょうさんは喇叭がきこえるやうな気がしたと。わたしは「聞こえくる」と平気で嘘をつくかもしれない。このやうな光景を前に深呼吸したいとこの頃切におもふ。

◎近辺に時計塔があるかと頭を巡らせた。近くの三角公園にさういへばあつた。防災スピーカーの下にあるデジタル時計。時計塔とは言い難い。この句の時計塔は由緒がありさう。少し遅れ気味なのかも知れない。梅雨時の朝日が元気づけるやうに当たりはじめた。懈怠といふ硬い言葉が効いてゐる。

バス

谷川の涼風届くバスの中
山百合やバス停あればバスが来る
バス停を離れ片陰バスを待つ
朝寒や老人送迎バスを待つ
節分草大型バスを列ねをり
人気なきバス案内所燕の巢
祭あとバスで飲みきる缶チューハイ
孟宗の被さるバス停昼の虫
秋の風親子の罷バス見送る
呼び止めて走り乗るバス秋暑し
バス停の小さき椅子に白日傘
バス停の壊れしベンチ牛蛙
バスの旅鶴まひとびて青田中
ゆつくりと走るバスより木槿かな
送迎のバスにも慣れてチューリップ
夜行バス七曲りして星近く
誰もゐないバスに乗り込む次は夏
バス停で待つ間に銀杏ニツツ
冬麗のトロリーバスに乗りしこと
終点のバス降り枯野風まとも
初霜や通園バスは賑やかに

高橋 信佑
石森 理和
鈴木多枝子
田中 藤穂
石森 理和
長崎 桂子
赤座 典子
篠田 純子
早崎 泰江
篠田 純子
芝宮須磨子
田中 藤穂
渡邊 友七
須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
佐藤 恭子
鎌倉喜久恵
定梶 じょう
長崎 桂子
須賀 敏子

終バスは降りて見送るみぞれけり
はつ夢や歩けぬはずの母と行く
着ぶくれてみんな善人峠バス
バスの中大阪弁の暑さかな
バス停の椅子に一陣青嵐
おむすびの新海苔の香も夜行バス
春尽きてバスや高速京都行
白シャツや水上バスの操舵室
富士九月バス一台の重さかな
菜種梅雨二時間置きのバス路線
青葉風バスに前乗りうしろのり
さはやかや都バスの女性運転手
緑陰のバス停名物團子汁
桜紅葉知らない街のバスに乗る
大カーブ雪落し行く夜行バス
バス停に橋の名つづく花の雨
雁一縷帰るバス待つ列にゐて
終バスか春月についてゆきにけり
ある時は月が並走帰省バス
喉かゆくなる麦秋のバスに揺れ
濃く点す苗代寒の終バスは
リハビリの送迎バスに春日射す
荒梅雨トロロのバスの来るやうな

定梶 じょう
篠田 純子
定梶 じょう
鎌倉喜久恵
森山のりこ
赤座 典子
定梶 じょう
篠田 純子
堀内 一郎
長崎 桂子
篠田 純子
篠田 純子
田中 藤穂
田中 藤穂
篠田 純子
佐藤 喜孝
定梶 じょう
定梶 じょう
竹内 弘子
定梶 じょう
早崎 泰江
篠田 純子

もみつ葉を蹴って村宮バス来り
冬ぬくしバス待つ合ひ間体操す
都バスで飛ばすぜえなんぞと紅葉狩
バスがもう来る頃師走夕やけて
バス停にバスは来るはづ草刈跡
バス停へ近道葡萄棚くぐる
彼岸桜水上バスで菩提寺へ
崖氷柱電車とバスを乗り継いで
水上バスの日の丸燃れる涅槃西風
バス停に白鷺一羽立ちをりし
津波後のバスは灯を入れなほ走る
屋根のないバスにて秋の銀座かな
ゆふぐれを乗せてバス来る枯田中
落花霏々バス停めざす肩車
路線バス薨に朝日桃の花
二停留所前にバスある夏の雲
鼻長きバスに酔ひしも青田道
バス停の屋根に魚網や五月晴
観光バス辣蕪の花へ客降ろす
水上バスの船底ガツと花の冷
筆竜胆バス定刻で乗り遅れ
祭髪浅草へゆく二階バス
日焼けして帰りのバスの砂ざらざら

井上 石動
篠田 純子
篠田 純子
定梶 じょう
佐藤 喜孝
定梶 じょう
篠田 純子
須賀 敏子
篠田 純子
山莊 慶子
佐藤 喜孝
須賀 敏子
佐藤 喜孝
赤座 典子
石森 理和
佐藤 喜孝
森 直子
赤座 典子
田中 藤穂
篠田 純子
須賀 敏子
田中 藤穂
篠田 純子

時刻ややバスが遅れて冬に入る
バスを待つために白息もて並ぶ
終点から又電車バス初の旅
パステル
新緑やパステル紙をすべりゆく
花曇山の近付きパステル画
パンジーやパステルカラーの園児帽
春の雲パステル調の天井画
パスポ
春の水西施訪ねしパスポ
梅雨冷の忘れられてるパスポ
パソコン
パソコンを眺めるばかり秋微雨
冬なかばパソコン閉じて今日終る
パソコンと飾兜が並びけり
隣室よりパソコンの音冬に入る
干し肉と煎餅パソコン夜長かな
パソコンと無縁なる指栗を剥く
パソコンを持たぬ生活小鳥来る
畑・畠
雪もよひ豆幹を焚く畑の中
畑を打つ助人ひとり来てゐたり
みぞ萩の色あざやかに畑の隅

定梶 じょう
定梶 じょう
石森 理和
東 亜 未
長崎 桂子
大日向幸江
赤座 典子
東 亜 未
鈴木多枝子
鎌倉喜久恵
須賀 敏子
須賀 敏子
篠田 純子
石森 理和
田中 藤穂
田中 藤穂
鈴木多枝子
後藤 志づ
河合 笑子

あとがき

『俳句の尾緒』の尾緒

棕鳥は留鳥だが秋の季語。辞書の②には「田舎から江戸の町に出てくるものをあざけつていう語」とある。辞書で分かるやうに言葉の意味はさまざまに派生して行く。言葉は人々の生活に密接に関はつてゐる。それとは別に新語もゾクゾクと造られ、そして使はれいくつかが生き延びて行く。年末には新語大賞なるものが発表される。昨年は「映える」。「ばえる」とよむさうだ。一昔前、句会で「道の駅」に幾たびか出合った。自動車文明に浴されてゐなかつたのでマイナーな言葉を俳句に使つたものだと思つた。本当はわたしのアンテナの錆を危惧しなければならぬ事であつた。「はしたて集」の純子さんの「マジックアワー」も調べて分かる始末。何十年句会に通つてもいつも分からぬ言葉にであふ。いや辞書にない言葉も出てくる。正に言葉は人々と共に生きてゐる。

棕鳥といへば数年前北海道の茂辺地の畠道を歩いてゐた。珍しく畠に人が出てゐた。どちらから話しかけたのだつたか？小豆の後始末作業をしてゐたらしい。何処からと問はれたので東京からですと。私は上野のことはよく知つてゐるよ、数日後には働きに出かけると話してゐた人をなつかしく思ひ出した。

棕鳥と人に呼ばれる寒さかな 一茶

(喜孝)

二〇一九年七月号

発行日 七月十四日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)